

# 幼稚園教育において育みたい資質・能力について ——幼稚園・小学校の連携を重視した 「健康」領域の検討——

## Qualities and Abilities to be Fostered in Kindergarten Education: The Examination of “Health Area” with an Emphasis on Cooperation Between Kindergartens and Elementary Schools

三浦 裕

Yutaka Miura

### はじめに

各学校は各種の法的基準に基づき、教育を実施してきている。直近の指導要領等の改訂において、「幼稚園教育要領解説（以下、「幼解説」と略）<sup>1)</sup>」及び「小学校学習指導要領解説総則編（以下、「小総解説」と略）<sup>2)</sup>」には、幼稚園と小学校（以下、幼小と略）の連携の旨が新規に記載されるようになった。しかし、その連携の具体的な方策や内容等については解説されていないため、就学年齢が継続する幼小及びそれ以降に続く学校では、異校種間の連携についてそれぞれ独自に検討する必要性が生起している。直面する課題となっているこの連携に関するさまざまな課題については、解説等に示されている連携の考え方について整理する必要があるとともに、具体的な学習指導計画の作成等が求められる状況となっている。

このため、本研究においては幼稚園教育の一層の充実を目的として、小学校との円滑な連携のあり方を探るべく、連携の背景や内容などについて整理するとともに、連携を重視した学習指導計画案を作成し、今後のよりよい幼稚園教育のあり方について検討を行うものである。

### 連携の前提となる考えについて

学校教育法によれば、「学校とは、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学及び高等専門学校とする<sup>3)</sup>」とされている。このため、幼稚園はすべて

の学校教育の出発点となる。

文部科学省は幼小の連携について、「幼解説」の改訂時に2016年の中央教育審議会答申を踏まえた基本的な考え方として「小学校教育との円滑な接続」、「幼稚園教育が小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながること」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の小学校教師との共有」などを挙げている。また、「小学校学習指導要領解説体育編（以下、「小体解説」と略）においても、学校間の接続として「幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実」を挙げ<sup>4)</sup>、さらに「小総解説」では「小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」と示されている。

この接続の意図するところは単なる就学年齢的な接続という意味だけではなく、教育目標や内容の繋がりも含めた接続である。この関係性が充足された時に、「連携」が成立する。しかし、各解説等にはこのために必要とされる教育課程の編成における子どもの姿や共通する内容などについては記述されていない。

### 幼稚園と小学校における教育の目的

教育の目的・理念については教育基本法に示されており、幼稚園及び小学校以降も共通する<sup>5)</sup>。学校教育法においても、幼小の目的が明確に示されている。ここでは紙幅の関係上条文は割愛するが、幼稚園では小学校以降の基礎を培うこと、小学校では基礎的なものを施すことがその要旨となる。

### 連携する目標と内容

連携するためには、共通する内容を事前に明確化しておく必要がある。幼小の解説等において共通している内容は、「育みたい力」として示されている。

「幼解説」における育みたい資質・能力としては、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」が、また「小体解説」においては『「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の育成を目指す資質・能力』という幼稚園と同様の3項目が示されている。

「幼解説」には「～の基礎」という言葉が追加されている2つの資質・能力があるのに対し、「小体解説」ではそれらの記載はない。したがって、幼稚園では小学校以降に続く資質・能力の「基礎」を育むという点が明確に示されている（表1）。

表1 育みたい資質・能力

	幼稚園教育要領解説	小学校学習指導要領解説総説編
	知識及び技能の基礎	知識・技能
1	豊かな体験を通じて、幼児が自ら感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりすること	何を理解しているか、何ができるか 生きて働く「知識・技能」の習得
	思考力・判断力・表現力等の基礎	思考力・判断力・表現力等
2	気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること	理解していること・できることをどう使うか 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
	学びに向かう力・人間性等	学びに向かう力・人間性等
3	心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすること	どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

表中の「知識及び技能の基礎」とは、「生きて働く『知識・技能』の習得」へ続く前段階として、五感を通して感じることや気付くこと或いは頭や体を使って分かったりできるようになることである。また、「思考力・判断力・表現力等の基礎」とは、「未知の状況にも対応できる」ように得られた知識や成果を自分なりに試行・工夫したり表現したりすることである。さらに、「学びに向かう力・人間性等」とは、社会・世界と関わる中でよりよい人生を送るために学びを人生や社会に生かすために今の生活をよりよくしていこうとすることである。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について

この育みたい資質・能力がどのように成長してほしいのかについて、「幼解説」においては「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として提示している（表2）。その内容は表中にあるように健康な心と体、自立心、共同性など合計10項目である。

この10項目の内容は、幼児を10項目の観点から多面的・全般的に育成する内容である。つまり、領域ごとに輪切りの資質・能力として限定するのではなく、取り上げる題材の中に育成が求められる資質・能力を関連付けて盛り込むという考えである。

表2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

1	健康な心と体 幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
2	自立心 身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
3	共同性 友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

4	道徳性・規範意識の芽生え 友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
5	社会生活との関わり 家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
6	思考力の芽生え 身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
7	自然との関わり・生命尊重 自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
8	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気づいたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
9	言葉による伝え合い 先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
10	豊かな感性と表現 心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

一方、「小体解説」においては「幼解説」にある資質・能力についての具体的な記載はなく、教科の目標の3つの改善内容を当てはめている（表3）。この内容は表1の資質・能力を目標という観点から言い換えた内容であるが、これらは目標レベルの表現であり内容との関連については具体的には記載されていない。「小総解説」についても調査したが、具体的に「育ってほしい姿」という言葉の記載はなかった。

表3 目標の改善内容

1	2	3
その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。	運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。	運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

以上を整理すると、「幼解説」においては10項目からなる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と3つの資質・能力を区別して記載はしているが、両者の対応関係性について検討している訳ではない。また、「幼解説」にだけ記載されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は育みたい資質・能力が内面化された幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿であると示されている。

したがって、育みたい資質・能力として幼稚園以降において共通している項目は「知識及び技能（の基礎）」「思考力・判断力・表現力等（の基礎）」「学びに向かう力・人間性等」の3項目であり、連携について検討を行うためにはこれら3項目に共通する10項目との対応関係について整理・検討を進めなければならない。つまり、3つの資質・能力が基本となり、幼稚園ではそれらに基づく「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」及び5領域の対応関係が柱となる。

これらの対応関係は多種多様かつ複雑になるため、実際の指導では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある。つまり、連携は基本的な要素を継続共有するという意図での対応関係として捉えることが重要であるため、各項目内容の関わり方や対応関係は常に一対一という限定的なものではなく、すべての領域や内容に共通・関連するものであり、そのウエイトは領域ごとに異なるものである。

### 幼稚園と小学校の連携のなごれ

以上のように、解説等には異校種間での連携を重視する内容が謳われているものの、連携の事例や工夫などは提示されていない。これをカリキュラムの観点からとらえたのが、国立教育政策研究所による幼小接続期カリキュラムである。

幼小接続期カリキュラムには、「アプローチカリキュラム」と「スタートカリキュラム」とがある。幼稚園については10の姿と同様に幼児期の学びが小学校の生活や学習で生かされよう工夫された5歳児のカリキュラムを「アプローチカリキュラム」としている。小学校については幼児期の育ちや学びを踏まえて、1～2年の授業を中心とした学習へうまくつなげるため、入学後に実施される合科的・関連的カリキュラムを「スタートカリキュラム」として提示している<sup>6)</sup>。しかし、この連携カリキュラムについては幼児教育施設の教育は多様であるため、施設類型の違いを越えた共通性が見えにくく、スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、幼保小の理念が共通していないなどの指摘があり、課題が残されていた。

このため、2023年には中央教育審議会の「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」として審議をまとめ、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）<sup>7)</sup>」及び「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）（以下、「参考資料」と略）<sup>8)</sup>」を公表している。この後者の「参考資料」には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとし、架け橋期のカリキュラム策定ができるように工夫が列挙されている。

### 学習指導計画の作成にあたって

幼小のスムーズな連携を図るためには、小学校入学時に直接接続する低学年の指導計画を視野に

入れる必要がある。幼稚園におけるアプローチカリキュラムについては「参考資料」を、また小学校におけるスタートカリキュラムについては「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」を土台として、以下に単元計画（案）を作成する。

なお、本研究において取り上げる事例は、寒冷積雪地において代表的な雪遊び及びスキーである。その理由は、大きく2つある。1つ目はスキーという身体運動は日常生活やスポーツにおける歴史的・世界的な文化財であるという点である。先人が作り上げた貴重な身体文化を、学校教育において継承・発展させるという教育の意義や役割を学校教育のスタート地点としてこの幼小の連携が担うこととなる。2つ目としては、旭川市内の小学校スキー実施率が100.0%であるという現状である。小学1年生の冬休みの課題には、「スキーを履いて、リフトに乗ること」などの学校もある。このため、小1の保護者のみならず、園児の保護者も入学前に子どもをスキー場に連れて行ったり、スキースクールに預けたりするケースも多い。

### アプローチカリキュラムの事例

#### 1) 単元計画について

##### 1-1) 単元名 「ゆき と あそぼう！」

本案は基本的に年長組を想定しているが、対象年齢やスキーの実施時間を1/3以下に短縮するのであれば単元名を「ゆき で あそぼう！」、或いはソリやビニール袋などを使って滑る内容を中心とするのであれば「ゆき を すべろう！」なども考えられる。本単元内容の小学校体育領域への進展としては「スキー遊び」のほか、「体づくりの運動遊び」「器械・器具を使っての運動遊び」などが考えられる。

##### 1-2) 単元について

###### 1-2-1) 単元の目標

積極的に冬の自然を感じ取り、関わり合いながら行う雪遊びやスキーを履いた運動遊びをすることを通して、運動遊びの仕方を知り、楽しく遊ぶことができる遊び方を見つけるとともに、場の安全に気を付けて、友達と仲よく取り組むことができる。

(この書き方は、「参考資料」と同様に3つの資質・能力別に表記してはしない)。

###### 1-2-2) 単元の指導計画 (年長組・全6時間：雪遊び2時間・スキー遊び4時間)

	○主な学習内容 ・学習活動
1   2	○自ら積極的に冬の気温や風等の自然を感じ取り、降ってくる雪を避けたりキャッチしたり、園庭にある雪を動かしたり丸めたりしながら雪の特徴を見つけるとともに、雪上でできる手軽な運動をする。 ・服装を確認し、元気に園外へ出て雪を触り、その形を観察したり、集めた雪を丸めたり投げたりして楽しむ。 ○雪の積もった園庭をいろいろな方法で歩いたり転がったり、小山を上ったり下りたりする。 ・前後左右/大・小股、姿勢などいろいろな方法で雪上を移動したり、ボールを使ったりいろいろな遊びをして遊ぶ。
3   6	○用具などを用いた運動をする。 ・ソリ (ビニール袋) 滑走・滑降など、伸び伸びとした動作で用具などを用いた遊びや活動を楽しむ。 ○靴や板の着脱の仕方を知り、片足や両足でスキーを履いて、歩いたり滑ったり止まったりする。 ・転び方や起き上がり方、方向転換 (変換) やスキー滑歩・滑走など、いろいろな動きをして遊ぶ。 ○スキーを履いて小山を上ったり滑り下りたり、停止したりする。 ・滑降やターン、停止など、スキー操作を工夫していろいろな動きをして遊ぶ。

1-2-3) 本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

○子どもの実態：地元の子は幼児期になれば冬には雪が降り寒くなり、滑りやすいことなどを既に生活の中での事実として体験している。しかし、雪を見て知っていても、虫眼鏡で結晶を観察することは少ないし、一人でリフトに乗ってスキーをすることは難しい。少子化の影響もあり、兄弟姉妹・友達から冬の生活についての情報を得る機会は少ない。スキーを履いて出かける世界が新しい自分の世界となる。

○育ってほしい姿：服装を整え、冬の屋外での友達と話し合いながら自然観察を行うことは、気温（自然）の変化などを感じ取ること、また雪の形状を見つけたり、雪はすぐに溶けること（生命の不思議さ）も分かるので、「自然との関り・生命尊重」「数量や図形などへの関心・感覚」「豊かな感性と表現」の内容に関係する。寒冷積雪という環境の中で身体活動を行うことは自ら生活する地域に対応することになるため、「健康な心と体」「社会生活との関わり」の内容に関係する。さらに、スキーという身近な環境に主体的に関わることは「自立心」の内容に関係する。

生まれて初めてスキーという用具を身につけての雪上での様々な動きは、子どもにとってこれまでの生活にはない新しい運動空間となる。雪上での友達の動きをみたり、その出来栄えについて考えたり予想したり工夫したりすることを先生や友達と話すことは「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」の内容に関係する。

2) 授業の実際（本時6/6）

幼小の連携という観点から、6時間単元のうち繋ぎとなる6/6時間を取り上げる。

2-1) 本時の目標

服装を確認した後、積極的に戸外へ出かけ、冬の気温や風・雪等の自然の特徴を観察し、場の安全に気を付けて、園庭にある雪を動かしたり丸めたりしながら、友達と仲よくいろいろな運動遊びをすることができる。

2-2) 本時の展開（6/6：( )内は10項目のうち該当する内容）

主な学習内容	指導上の留意点
○服装を確認した後、戸外の状況を感じ取りながら、運動に向かう準備をする。	・手袋・帽子・スキー用具などをお互いに確認し合い、運ぶ（自然との関り・生命尊重）。
○片足や両足でスキーを履いて歩いたり滑ったり、方向転換（変換）したり、止まったりする。	・本時にしたい遊びや活動を出し合うため、雪の中での遊びについて聞き、イメージを湧かせる（思考力の芽生え）。
○スキーを履いて小山を上ったり滑り下りたり、停止したりする。	・片足や両足じゃんけんで体全体を使って大きく表現したり、方向転換（変換）をする（共同性）。
	・スキーを履いていろいろな向き・歩幅・姿勢を変化させ、楽しみながら遊ぶ（健康な心と体）。
	・小山を上ったり滑り下りたり、停止したりしたことを友達と伝え合う（健康な心と体、言葉による伝え合い）。

## スタートカリキュラムの事例

### 1) 単元名「ゆき と あそぼう」

#### 1-1) 本単元につながる幼児期の子どもの姿 (本時1/4)

積雪寒冷地の幼児は冬の寒さを感じたり、降ってくる雪を不思議そうに触ったり、集めたりして自分の体を動かすのが好きである。スキー用具や雪遊びに興味を持ったりして、雪の中でも次第に全身を動かし、雪と遊ぶ心地よさを味わうようになる。「できるようになりたい」と自分なりの目標に向けて取り組み、友達の動きを見てまねたり、やり方を聞いたり、応援されたりしながら繰り返し挑戦し、やり遂げる達成感を味わうようになる。また、友達とルールのある遊びを楽しみ、競ったり力を合わせたりして自分たちの力を発揮するようになる。さらに、様々な遊びにおいて、その遊びが楽しくなるように考えを出し合いながらルールについても考えるようになる。

#### 1-2) 単元について

##### 1-2-1) 単元の目標

友達となかよく手軽な雪遊びをしたり、スキー用具を使って自分の体を動かしたりすることを通して、スキー遊びの仕方を知り、楽しく遊ぶことができる遊び方を選んだりしながら、場の安全に気を付け、関わり合って取り組むことができる。

##### 1-2-2) 単元の指導計画 (全4時間：スキー遊び)

	○主な学習内容	・学習活動
1 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自ら積極的に戸外へ出かけ、雪の状態を知り冬の感触を味わう (遊びに向かう力、人間性等)。</li> <li>・服装や用具を確認し、雪の状態を知り準備する。</li> <li>○用具の名称や着脱、移動の仕方を知り、いろいろな方法で校庭を散策する (知識及び技能)。</li> <li>・起き上がり競争やストックを使った小山登行や前後左右/大・小股での移動、片足・両足スキーによる方向転換 (変換) などのスキー操作 (滑歩・滑走・停止) をして遊ぶ。</li> <li>○友達の登行方法や滑り方を見たり真似してみるなど、工夫しながらスキー運動をする (思考力、判断力、表現力等)。</li> <li>・友達を見て、自分に合う転び方や起き上がり方、滑歩・滑走・停止などのスキーの操作方法を見つけて工夫をしながら遊ぶ。</li> </ul>	
3 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本日の天候を知り、取り組みに見通しを持つ (遊びに向かう力、人間性等)。</li> <li>・天候や服装・用具を確認し、前時の滑るイメージを思い出し、本時のイメージを膨らませる。</li> <li>○ストックを使って小山を上り、左右へのターンの仕方を知り、曲がり切ったところで停止する (知識及び技能)。</li> <li>・直滑降や斜滑降後の停止とテール開き (減速)、ブルークボーゲン、コーンで曲がる滑りをする。</li> <li>○友達と話し合いながら、安全に滑降・ターン・停止するように、スキー滑走をする (思考力、判断力、表現力等)。</li> <li>・登行や滑降の方法を選択し、なかよく安全にターンや停止をして遊ぶ。</li> </ul>	

### 2) 本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には不思議に思うことややってみたくらいに向かって、自ら全身で取り組んだり挑戦したりする。その挑戦への達成感と挫折感も、また全身で感じ表現することを経験している。友達と一緒に物事に取り組むことは共通の目的を目指すことにつながるため、話し合いの必要性や工夫の共有などの経験が蓄積されていく。このような経験を小学校入学後にも継続するように、友達と関わり合う冬の自然という環境の中で協力して一緒に目的に向かう喜びを味わうことが大切である。その際、安心して活動ができるように幼児期に経験してきたスキー遊びや類似した活動を取り入れ、小1ギャップが生起しないようにすることが肝要である。特にスキーの場合は、限られた季節・時



間しか確保されないため、日程的に繰り返しの授業は組めない。スキー遊びの経験は休日などでの遊びにもつながり、日常での学校生活を豊かにしていく。

### 3) 授業の実際 (本時1/4)

幼小連携の観点から、1/4時間目を取り上げる。

#### 3-1) 本時の目標

用具の名称やスキー板の着脱、移動の仕方を知り、友達の滑りを見ていろいろな方法を見つけ、なかよく話し合いながら、安全に校庭を散策する(土台となるスタートプログラムには3つの資質・能力の記載がないため、展開部分では省略している)。

- ① 用具の名称やスキー板の着脱、移動の仕方を知り、移動のためのスキー操作をする(知識・技能)
- ② 友達の滑りを見て自分の課題に気づき、工夫するとともに他者に伝える(思考力・判断力・表現力等)
- ③ 天候に応じた服装で、安全に留意し協力して取り組む(学びに向かう力・人間性等)

#### 3-2) 本時の展開 (1/4)

○主な学習内容	指導上の留意点
○天候を確認し服装や用具を整え、スキーに向かう準備をする。	・手袋や帽子などの忘れ物がないか、点検する/手袋や板は間違えやすいので、名前を記入させておく/スキー靴を履いていても、無理なく楽しんで体を動かす遊びを取り入れる。
○これまでのスキー経験を振り返り、スキー用語を思い出したり知ったりする。 ○ストックを使って小山を上り、安全に下りてくる。 ○直滑降や斜滑降及びその後にそのまま停止する。 ○直滑降や斜滑降後のテール開きで停止する。 ○斜滑降後のテール開き(減速)、コーンのところで曲がる滑りをする。	・本時でしたい遊びや活動を出し合うために、これまでのスキー経験を振り返る/幼児期に親しんできた斜面での活動を取り入れて、安心して運動できるようにする/直滑降で滑っても、自然に止まるスペースを確保する。「もっと早く止まるにはどうしたらよい?」/児童同士で話し合わせ、滑らせる。 ・直滑降や斜滑降の後半から、両スキーを開く指示をする。ストックは使わない/2つのコーンを配置し、曲がるように指示する/うまく曲がった友達の滑りを見つけ合う/ほかの児童が行っていない動きをしている児童を褒めたり紹介したりして、いろいろな動きを引き出したり広めたりする/どこが良かったのか、誰もが楽しんだり友達との関わりを増やしたりするために、話し合わせる。 ・まだ、難しいので、曲がる工夫を教師から提案することも考えられる。 ・教師も児童と遊びや活動を楽しんだり、輪に入ることが難しい児童と一緒に取り組んだりする/スキーに苦手意識をもつ児童には、教師と一緒に遊んだり友達同士で遊べるよう声を掛けたりする/児童が気付いていない安全面での注意事項は、教師が分かりやすく端的に示す。
○本時の内容を振り返る。 ○次時の見通しを持つ。	・全体に振り替えさせる/小山の上り下りや滑る順序は守れたか/テール開きで、止まれたか(減速)/テール開きで、曲がれたか(ターン)/話し合って、工夫できたか。 ・次時の希望を聞く/「次回にはどんな滑りをしてみたいかな?」/スキーで遊ぶ時の楽しい遊び方、ルールやきまり、してみたいことを出し合う。 ・健康確認を行い、用具の後片付けを支持する/※うまくいかない児童には、「こんなときはどうしていたの?」などと問い掛ける。困ったことも自分たちで解決していくという自覚を育む/寒い空間に不安を抱く児童もいる。滑れるようになることで、安心感が生まれる。

### おわりに

本研究においては、幼小の連携について整理・検討を行い、具体的な学習指導計画案を提示してきた。今回はスキーという歴史的・地理的にも価値のある題材を取り上げたが、この身体文化は幼小連携のみならず、学校教育上それ以降も連携する学習内容でもある。したがって、連携とは単なる年齢的な接続だけではなく、幼小の学習の意義や価値を有する教育としての継続性や発展可能性について見据えることが重要である。このような連携を充実させることはスキーという身体文化の学習という

継続・発展を通して、世界に生きる子どもたち自身の成長と幼小それぞれの領域や教科等の充実に繋がる。今後は協力園・校とともに具体的な検証を行い、さらに充実を図りたい。

## 引用文献

- 1) 文部科学省. (2023). 幼稚園教育要領解説. 〈[https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_3\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf)〉 (2023年8月25日14時2分)
- 2) 文部科学省. (2023). 小学校学習指導要領総則編. 〈[https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt\\_kyoiku02100002607\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_kyoiku02100002607_001.pdf)〉 (2023年8月25日14時7分)
- 3) 文部科学省. (2023). 学校教育法. 〈<https://elaws.egov.go.jp/document?lawid=322AC0000000026>〉 (2023年8月25日14時13分)
- 4) 文部科学省. (2023). 小学校学習指導要領解説体育編. 〈[https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt\\_kyoiku02-100002607\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_kyoiku02-100002607_001.pdf)〉 (2023年8月25日14時13分)
- 5) 文部科学省. (2023). 教育基本法. 〈[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/about/mext\\_00003.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html)〉 (2023年8月25日14時31分)
- 6) 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター. (2023). 発達や学びをつなぐスタートカリキュラム—スタートカリキュラム導入・実践の手引き—. 〈[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum\\_180322.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_180322.pdf)〉 (2023年8月25日15時5分)
- 7) 中央教育審議会 初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会. (2023). 学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実(初版)～. 〈[https://www.mext.go.jp/content/20220307-mxt\\_youji1258019\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220307-mxt_youji1258019_03.pdf)〉 (2023年8月25日15時12分)
- 8) 中央教育審議会 初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会. (2023). 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料(初版)－「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼保小の先生と一緒に子供の姿から話し合おう－. 〈[https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt\\_youji-000021702\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_4.pdf)〉 (2023年8月25日15時14分)